

俳句雜誌

空

空
令和3年3月31日発行
第19巻1号
通巻第95号



2021・3
SORA 95号

媛神

柴田佐知子

万里行く貌で出てゆく受験の子

ゆく先は媛神の灘雛の舟

―「俳句」二月号・三月号より―

掴んでは放る赤子や日脚伸ぶ

蓄へし力を放つ二月の嶺

涅槃図の皺に鬼畜の微かな笑み

墓となる石を切り出す春の山

どの鳥も見向いてくれぬ巣箱かな

戦ひに割つて飛びこむ恋の猫

棟梁に新しき弟子水ぬるむ

赤子その手足で遊ぶ弥生かな

相愛の時ははるかに椿餅

鳴くときは目の細くなる子猫かな

我をもて閉づる家系や春の雲



福岡 高倉 和子

地震あとの歪な大地秋早

翼を憂しと蛤となる雀

前ばかり向く菊人形の並びけり

遊ぶごと集まつてくる浜焚火

顔を見て言葉を選ぶ冬の雷

押し問答の果てに海鼠を噛んでをり

休日のパンを厚切りして小春

白息のたつぷりとある魚市場

東京 中田みなみ

着膨れて簀橋を渡りけり

料亭の千鳥の曲も小春かな

バスの扉の開くや小春のポンポン船

仲見世のくすぐる五感冬あたたか

堂売りの数珠に桃いろ水温む

北開くや笑ひ集めし講の僧

デモ隊の声を離れしゴム風船

縁日は昨日で終り猫の恋

長崎 荒井千佐代

臥する身に聖水のごと冬陽かな

和筆筒に未だははの香冬ごもり

亡き人を忘るるための日向ぼこ

望みたる言葉かへらず竜の玉

クリスマス灘より闇のなだれ来る

胸中のをとこ老いけり虎落笛

大年の川底見せて被爆川

祈る手はハライソへ向け冬銀河

埼玉 服部 早苗

断りの手紙書き出す夜長かな

人の世の残り時間を色鳥来

ロックシンガー偏屈なれど露草好き

火をひとつどうぞ南蛮煙管かな

草紅葉風湧きおこる大カール

無花果をとろとろと煮て未婚なる

鶏頭のえりあしを搔き種もらふ

担がれて棚田を降るる案山子かな

北九州 深川淑枝

崎宮の鏡の昏き獵期かな

依代の岬の岩根鷹渡る

天頂の風に撓みて鷹柱

帰漁船鷹の渡りの風の中

鳥渡る縄目の固き碇石

鰯船へ真中しなる歩み板

流木の刺さる干潟や風邪心地

満ちてくる潮の明るし冬芒

広島 戸栗末廣

音立てて水の流るる良夜かな

菊脛消息一つ明らかに

ちちははの声は忘れず天の川

法華寺の水にあつまり稲雀

みづうみの刻々暮るる帰り花

短日のことりと自動販売機

初冬の空と海との境かな

煮凝やししばらく旅を怠けたる

福岡 角野良生

現世の色となりゆく羽化の蟬

山国の闇の厚さよいなびかり

てのひらの零余子に山の温みかな

みの虫の蓑内側は絹衣

休耕田虫の都となりにけり

赤いきのこ白いきのこ毒茸

天に鷹地に瓜坊の日和かな

どこまでも空どこまでも鷹の空



千葉 原 友子

地下足袋も大根も洗ふ束子かな
 嫁がする思ひに似たり球根植う
 抗へばばつさり斬つて蔓たぐり
 墓山は村の日溜り穴惑ひ
 冬麗や裏木戸出でてすぐに山

兵庫 林 徹也

格子戸の奥に本尊秋の風
 燻りし壁画収むる月の堂
 研ぎ上げし刃文のうねり寒の月
 礫像の脾腹をぬぐふ冬日かな
 去年今年母に供ふるかまど飯

北九州 河原 敬子

命綱かけて乗り出す松手入
 生くること励ますごとく天高し
 大花野弁当よぎる雲の影
 鴨寄り来扇のごとき水輪曳き
 鍛ふれば老いにも力寒椿

糸島 小林 朱夏

草刈るや生ある匂ひ進む
 ゆつたりと納戸横切る秋の昼
 稻雀セレモニーのごと飛び立てり
 時雨るるや残り少なきカレンダー
 かまど猫マスクの主を威嚇する

大串府 山本 則男

風音の山に収まる干菜風呂
 全集の時代もはるか日脚伸び
 まな板に鱗張り付く寒の入り
 日もひとつ月もひとつぞ返り花
 知らぬ間に声の老いゆく初時雨

粕屋 吉田 菫

あつあつの飯に塩鮭またがらす
 出席簿すこし濡らしぬ雪うさぎ
 拳突き上ぐる群衆櫻の芽
 春夕焼骨痛むほど叱られて
 鐘楼は遠流のごとし春の暮

春日 三井所美智子

落し文異界のごとき巖流島
 苦学生に鯖寿司食はずバイト先
 穴よりも農小屋好きな秋の蛇
 まだぬくきおからは無料大根買ふ
 万葉の路にぬた場や風花す

熊本 松田 明子

雪吊や百万石の縄の数
 笥迫の鈴の音こぼし七五三
 発つときは花散るごとき緋連雀
 隠沼の心許なき鴨の数
 紙の月しづしづ上る村芝居

福岡 山内 碧

曲がるたび色の濃くなる紅葉山
 全体重もて枯蔓を引きにけり
 廃校の跡へ花野の広がれり
 冬の鴉あまりにやさし過ぐる子よ
 畳紙開けば百花春夕べ

粕屋 秋 千 晴

お飾りの鯛の脚を揃へけり
 終ひ湯の柚子は湯疲れしてをりぬ
 元旦や互ひの帯を結び合ひ
 親よりも子が畏みて初詣
 転がして小石模様の雪達磨

大野城 森 田 明 成

追加されし薬よく効く小春かな
 青一筋荒野に映ゆる冬の川
 学友は飲みともだちや木の葉髪
 縄飛へ間合計る子とび込む子
 発車して静もる駅や石路の花

太宰府 西住 三 恵 子

音の無き流れに沿うて蛍草
 生も死も一夜のつづき木の実降る
 沈黙も時には愉し赤とんぼ
 山なみを照らし出したる冬満月
 鯉の餌小犬の餌や日脚伸ぶ

福岡 あさなが 捷

息荒く前脚太き狩の犬
 猪の対処法載せ回覧板
 石炭で栄えし街や山粧ふ
 初弥撒や祈りの声のたひらなる
 迷ひなき一点よりの筆始め

直方 石 橋 幾 代

曼珠沙華消えて大きくなりし山
 鶏の餌に混じる貝殻夕月夜
 大根干す背中に山の風受けて
 結界を隠してしまふ落葉かな
 眉をやや濃くかきマスクつけにけり

福岡 永 淵 恵 子

けん玉の腕前披露敬老日
 银杏落葉踏んで银杏の大樹まで
 残照にゆるみ始めし鴨の陣
 手袋の指切どこかたよりなし
 縄飛びに弟の背を押してやる

福岡 秋 津 令

高きより飾られてゆく聖樹かな
 冬日へと向きを変へたる母の床
 順々と翼を畳む鶴一陣
 鮫鱈の水引き摺つて吊さるる
 反逆の低き墓標や冬椿

直方 曾根富久恵

蠟燭の影絵で遊ぶ台風圏

鳥獣に威されさうな案山子かな

越して来し隣家に秋の灯がともる

冬晴や軒先で売る古布・端切れ

亡き猫の爪あと残る冬座敷

北九州 横田敬子

秋風や苔を纏ひし野の仏

廻廊の朽ちし列柱鳥渡る

古びたる縁起絵巻や秋深し

梵鐘に戦死者の名や冬の鴉

梵鐘の中は楽土か竜の玉

京都 天谷翔子

回転扉ふたりで入る秋の昼

約束の花野に来しが誰もみず

一生の嘘を花野に埋めて来し

日に三度母より電話石路の花

厨子出でし秘仏に赤き冬林檎

長崎 松尾龍之介

葛咲くや記紀万葉の濃むらさき

曇目に家族の記憶木の葉髪

秋燕の高きを舞ふは父ならむ

轢かれても枯蝻螂の貌三角

子離れのやうに木の実を落としけり

須恵 苑実耶

さはやかや機械油にまみれし手

種を採る去年の種は蒔かぬまま

秋夕焼播鉢の筋まるやかに

暮れ方の山の際立つ冬はじめ

北風に押し戻さるる勝手口

長崎 仲里奈央

和音弾く五の指弱し秋の空

コスモスや周りはみんな好きな人

山眠る滅多に電話鳴らぬ家

しり通りの途中で寝る子寒鼻

ささやかなしあはせ増えて賀状書く

岡垣 田中とし江

運動会玉を転がす子も転がる

園児らのおはやう百回秋の山

山頂のラジオ体操天高し

鶏鳴のすぐそばに墳草の花

公園の子は皆消えて冬夕焼

兵庫 えとう樹里

いちじくや父の角顔丸めがね

小鳥くるピラカンサ満つ母の垣

添ひ寝して子に起こさるる虫の夜

神妙に髪結はれをり七五三

弟のこほろぎ果てしクリスマス